

早稲田大学 国際教養学部 世界史 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	大問4の構成は例年通り。設問数は昨年45問から44問に微減。昨年まで全てマーク式だったが、今年は記述問題が登場。昨年、2年ぶりに出題された地図問題は消滅。難易度は昨年に比べ難化。とくに、東南アジア・中南米関係に難問が目立つ。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
	19世紀のイギリス社会と文化	- 問1の空欄補充は易しい。問3のイは、フェビアン協会設立は84年1月、これに対して第3次選挙法改正は84年12月と非常に細かい。問4のオは「タヒチ」からセザンヌは誤りでゴーガンが正解とわかる。これはタヒチといたらゴーガンという連想ゲームである。	標準
	19・20世紀の国際関係	空欄補充は易しい。正誤判定も大半は「誤って」いる部分が目立つ(例えば、問7 - イの「米国大統領ケロッグ」)のでとりくみやすい。問10の年代配列は難しい。レイキャビク会談とはアイスランドで行われた86年のレーガンとゴルバチョフの会談のこと。	標準 (一部難)
	東南アジア史	問1 - ウは「タイ文化の影響」が誤り。問2 - イのスールヤヴァルマン2世は12世紀の人物で、アンコール朝最盛期の王。アンコール=ワットを造営したのもこの王。問4 - アの強制裁培制度は1830年の導入。それに対しジャワ戦争は1825年の勃発。問7 - イのベトナム共和国とベトナム民主共和国は南北が逆。問8 - ウと問10 - エのラオス関係は出題が極めて稀な分野。パテト=ラオはラオス救国戦線が正しい。	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
	中南米史	<p>正誤判定文のポイントの多くは高校レベルを逸脱。とくに、正しい部分に特異な内容が目立つ。問1 - イのフアレスが独裁体制などはいかがわしさを感じられると思うが、問3 - イのペルー日本大使公邸占拠事件とトゥパクアマル革命運動など、疑ったらきりがない。正解のウは、ガルシア＝マルケス(ノーベル賞作家)が大統領候補という文脈にいかがわしさを感じ取れたかどうかで決まる。学習の成果としての知識で対応は事実上不可能。問4 - イは絵文字存在が誤り。キープは文化構想学部でも出題されていた。問5 - エのコロンブスは、歴史地図を参照していれば間違いとわかる。問6 - エのラス＝カサスはドミニコ会士が正しい。問7(1) - イのドミニカは、1814年にスペイン領となり、その後、西隣のハイチによる占領時代をたて独立した。(2) - アは二度ではなく三度が正しい。問9の記述は易しい。</p>	難

〔総合コメント〕

今年度初登場の記述式問題は基礎的内容ばかり。ここでは全問正答を期したい。定番の正誤判定は難問、そして奇問が目立つ。正攻法、つまり、学習を積み重ねて蓄積し知識を巧みに応用して正解に達するというやり方では対処が難しい。では、どうしたらいいのか？ 正解のポイントの「一本釣り」しかない。難しい内容は深く考えずに、それらしきポイントを探しあて、余計な心配はせずにポイントを頼って判断すれば、よい結果につながる。こうした修羅場をかいくぐるには、ただただ同種の問題に慣れておくしかない。年代配列も、89年の東欧革命(これは部分的には法学部の94年の論述問題と酷似)のように同年内の出来事が並び難しい。現代史の重要事項に関しては、年代を月単位で把握する心構えが必要である。